―――ずいそう―

古戦場探訪記

横山　茂

単身赴任七年目となる。生まれついての不精者であり，休日はあてどもなく過ごす。愚妻の小言にも煩わされずに，単行本などを読みつつ，気楽な一日が暮れる。

格別のこだわりもない雑食動物のごとき読書だが，最近は歴史物に傾いている。といっても，古代史論争など難しい題材であれば，数頁で睡魔との戦いになる。戦国時代を舞台にした，いわゆる戦記物がどうやら性に合っているようだ。

広く知られている太閤記や信長公記もさることながら，関八州古戦録や南海治乱記録などローカル色溢れた素朴な作品が，また実に面白い。歴史的な価値は低いようであるけれども，戦国の争乱を題材にした講釈師風な語り口は，肩が凝らず息抜きには都合がよい。槙島昭武や江西逸志子など，元禄・化政の江戸文化爛熟期に輩出した文筆家の手になる作品が，現代語訳で多数出版されている。

興味は多彩な登場人物や軽妙な展開だけにとどまらない。そこに登場する地名を探しあて現地に訪れることも，この類の本がもたらす楽しみの一つとなる。当時の日本は，戦国大名の富国強兵策によって地域経済が発達し，中世から近世への変動を始めた時期である。人口の増大や流動化が始まって，今の地名が定着したのであろうか。登場する地名の多くを地図の上に発見することができる。

この七年，東京を中心に神奈川や千葉などを転々としている関係上，関八州古戦録や小田原北条記を反芻するように読み，気が向くと古戦場や旧跡を訪れている。旧跡の多くは公園として整備が行き届いている。園内を散策し，古の栄枯盛衰に思いを馳せながら瞑想に耽けるつもりが，混沌とした頭は意に反して勝手な妄想を開始する。妄想し，散策によって適当に汗をかきながら，休憩所で飲むビールの喉ごしは誠に甘露である。

現在は船橋に住居し，単行本と地図を片手に千葉県内を徘徊する。戦国時代には，千葉氏，南総里見氏などの大名が蟠踞して，古戦場には事欠かない。

西船橋から京成線で数駅西にか国府台（こうのだい）という駅がある。古代における下総国府の地であろう。国分寺，国分尼寺跡がある。周辺は閑静な住宅地であり，東京医科歯科大などの学校や国立国府台病院などが数多く建ち並んで，さながら学園都市の景を呈している。近くにはじゅん菜池公園もあって，対岸の東京とは別世界の趣である。

江戸川左岸に沿って10分ほど北に向かうと，川の中ほどまで岬のように突き出す小高い台地がある。坂道を上ると20m程の断崖上にある里見公園に到達する。

この台地に15世紀，太田道灌が城塞を築いたといわれているが，公園はその旧跡である。16世紀に，ここで二度の大会戦が行われたことは意外と知られていない。江戸後期の大改修以前は利根川の本流であった江戸川を挟み，武相の大軍を率いた小田原北条氏と，国府台に陣地を築いた房総勢が，双方万余の軍兵を擁して対峙した。優勢な武相方の軍が渡河して，国府台の房総軍を二度とも撃ち破っている。

公園は市民の憩いの場として整備され，避難所ともなっているが，休日でも人は疎らで散策には好都合である。二度の会戦で敗れた房総軍に多数の戦死者がでたが，園内に幾つかの碑が建立されて兵どもの霊を慰めている。その一つは亡霊塚と称され，鬱蒼とした木立の中に幽気が漂って近づく人もいない。

公園の奥にある茶店で，眼下の江戸川を見渡しながら一息入れる。本丸跡からは遠く秩父，丹沢も展望できるとのことであるが，西の彼方は霞がたなびいて山の姿形は定かではない。都会の雑踏を忘れ，しばし戦国の世に思いを馳せながら時を過ごす。

渇きを癒したところで再び江戸川に沿い北へ30分，矢切の渡しに着く。水戸街道の要衝であるが所以で決戦の場となったのであろう。矢切の名称は，このとき両軍が激しく戦い，互いに矢を射尽くしたからとも伝えられている。

夕暮れとともに寮へ戻り，一人飯を喰らう。風呂に入って床につくと，心地よい疲れからたちまち寝付く。明日からの喧噪に備えて，英気を養った一日であった。

―よこやま　しげる　日本舗道株式会社取締役工務部長―